あとがき

今回の展覧会は荒川修作の初期の作品すなわち，アラカワがわが国を後に1961年ニューヨークへ行き，その年から翌年にかけて制作した作品6点——100号強，アクリル（カンバス）——を展示するものである．

さる1月中旬，ニューヨークから届いたこれらの作品をヤマト運輸の倉庫で，私は初めて見て驚いた．大変シンプルで殆んどベースの地の色であると言ってよく，描かれているところが大変少ない作品なのである．しかし，じいっとよく見ていると，ジワジワといろんなものが見えてくる．何といってもベースになっている地の色が甚だデリケートで人間の肌の色に近い淡乳白色であることが，私を不思議な想念に導くのである．この色は美しい．そしてその上に極めて抑制的に描かれた鉛筆のドローイングと，かすかな色彩がほどこされている．この画面の内部にアラカワの激しい想いが塗り込められているのを感ずる．この6点の初期の作品はアラカワのその後の仕事を理解するうえで重要である．

1964年にこの作品をみたマルセル・デュシャンはアラカワに次のように語った．「君のやっていることはペインティングのためのペインティングだ．職を持ち給え．どちらも絶対不可欠なことなんだ．」と．思うにこの言葉は当時の若いアラカワにとっては，生きる指針となった啓示的な言葉であった．芸術のための芸術，人生のための芸術，そのいずれでもなく，芸術と人生——生きること——は等価なのだとするデュシャンの言葉はいまの私の胸にもこたえる．こたえるとともに胸のツカエが消えていくという相乗効果がある．純粋な仕事と具体的に生きること，この二律背反にわれわれは常に直面している．この両方がともに等価だとする複眼的な考え，生き方こそデュシャンのものなのだ．アラカワがニューヨークに来て間も近く，デュシャンというよき師に出逢ったことの意味は大きい．アラカワはデュシャンと激しく口論するほど深く突込んだ付合いであったのだ．アラカワはデュシャンに応えて，自分の仕事を展開していくのである．

アラカワがニューヨークへ行った当座は1年間に7回も宿所を転々とする状況で，小野洋子さんからキャンバス等の世話をしてもらったりしたという．当時のアラカワの置かれている状況からして作品のサイズは100号が最大で，絵具等の画材も不充分であった．したがって，ここに展示されている作品が，極めてシンプルで禁欲的であり，鉛筆で描かれていることも，色彩が制限されていることも，ベースの地の色彩がほぼ統一された色彩であることも，よく理解できるのである．そのことがかえってアラカワの仕事を高貴なものにしているのだ．ピカソの青の時代のブルーとアラカワの肌色の乳白色とは共通したところがある．

この2月5日から12日まで私は娘の真知とともにニューヨークを訪れ，幾人かの作家，そして画廊を訪問した．一夕，荒川さんの自宅を訪問し，この展覧会の打ち合わせ等を含め5時間ばかり話し合い面白かった．最後は「おめん」なる近くの日本料理屋でマドリン夫人と四人で，夕食をともにして別れた．荒川さんは日本の文化の状況について大変興味をもっており，日本のことを心配している．甚だ激烈なる文化批評も飛び出し，一瞬，荒川さんがわが国のことを憂える国士的風貌を呈するのをみて，改めて私は荒川さんの顔をマジマジとみたものである．娘は興奮して，今夜はねむれないわ，と言ったのが印象的であった．楽しい一夕であった．

ところで，当画廊の展覧会のほぼ同時期，西武美術館（池袋）では「荒川修作—意味のメカニズム—」展（3/11～4/3）が開催される．さらに3月14・15日の両日，西武池袋スタジオ200で荒川修作が作成した映画が上映される．このことをお知らせして置きたい．荒川夫妻は3月初旬に来日，3週間ばかり滞在の予定ときいている．その日本滞在がこころよいものであることを希っている．

最後に，この展覧会カタログのためにテキスト「散乱する人工頭脳」をご寄稿いただいた美術評論家の伊藤俊治さん，デュシャンの言葉を訳していただき，その解釈をお示しいただいた哲学者の市川浩さん，そして作品を撮影していただいたカメラマンの成田弘さんの三氏に厚く御礼申し上げる．

1988年2月18日

佐谷画廊　佐谷和彦